

令和5年度 1学年スピーチコンテストの概要

1. 目的

校内スピーチコンテストは、本校の特色である国際理解教育の一環として、生徒の英語のスピーキング力を伸ばすことを目的としている。

2. スケジュール

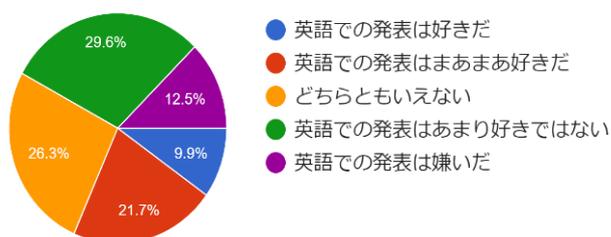
表1：スピーチコンテストに係るスケジュール

日時	内容
7～8月	事前準備（スピーチ題材選択、暗唱練習）
9月初旬	1次予選（学年で36名が2次予選へ通過となる。）
9月下旬	2次予選（学年で9名が本選に進出する。）
10月中旬	ALT 教員・指導教員による個別指導
10月25日	スピーチコンテスト本選、アンケート回答

3. 生徒による質問紙調査の結果

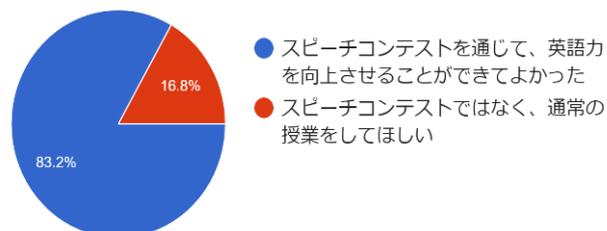
スピーチコンテスト本選終了後、生徒の学習成果の把握と本活動の改善を目的として、1学年の生徒を対象にスピーチコンテストに係る質問紙調査を行った(有効回答数304名)。

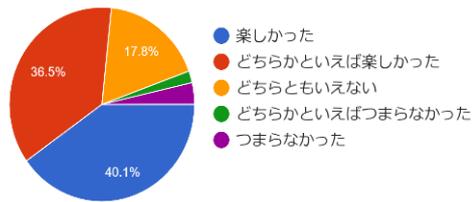
英語での発表活動に対する質問項目では、好意的に受け止めている生徒は、31.6%にとどまっている(図1を参照)。1学年では、3つの英語科目に取り組み、ディベートやオンライン英会話等のスピーキングに重点を置いた指導を行っている。しかしながら、生徒の英語で話すことに対する不安を解消するほど、アウトプットの機会が十分ではない現状がある。



←図1：英語での発表活動に対する姿勢

図2：スピーチコンテストの必要性





←図3：スピーチに取り組む姿勢の自己評価

一方で、スピーチコンテストの必要性に関する質問項目では、83%の生徒がスピーチコンテストを通して、自身の英語力の向上に寄与していたことを示唆し、スピーチコンテストの有用性を示しているといえる(図2を参照)。また、生徒のスピーチへの自己評価に関する質問項目では、76.6%の生徒がスピーチコンテストを肯定的に捉えていた(図3を参照)。生徒の自由記述では、「間を開けて伝えようとする意識をしたり、なるべく多くの人のスピーチを聞いて、自分のスピーチに良さを取り入れることが大事」という記述があり、他者のスピーチや動画などを参考に自分自身のスピーチを改善しようとする姿勢がみられた。さらに、「同級生だから自分も頑張ればうまく発音できると思えて頑張れると思った」という記述からは、「話すこと」に苦手意識を持ちつつも、同級生と共に準備に取り組んだ過程が、スピーキングへの心理的な障壁を除くことにつながったと考えられる。

これらを踏まえ、本活動は、生徒にとってスピーキング活動に難しさを感じつつも、互いに発表し合うことで、発表を改善するための効果的な方法や手段を検討し、実践する機会になり得たのではないか。今後も生徒の英語を用いたアウトプットへの不安を解消し、発表活動が生徒の自己の成長が実感できる機会となるように、言語活動の充実を図りながら、学習支援を行っていく必要がある。